

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

総論

—世界農業遺産を通して考えた「地域の力」と「私のこれから」—

1. 研修前に抱いていた考え

私は元来、「世界の貧困を解決する一助になりたい」という目標を抱いている。特に、開発途上国における農村の生活改善に関心を持ち、フィリピンのイフガオ棚田や日本の能登半島の里山里海のように、伝統的農法が地域文化や環境とどのように結びついているのかを学びたいと考えていた。

これまで私は、社会構造や貧困問題、持続可能な開発の在り方を少しずつ学んできたつもりだ。また、地域文化の保全や再生に関する学びの中で、「地域の課題解決は外部の支援だけではなく、内部の人々の意志と誇りに根ざしてこそ実現する」という視点に関心を持つようにもなっていた。

その為、本研修では、単に観光的な視察に留まらず、「世界農業遺産」としての能登の里山里海が、どのようにして人と自然の共存を実現しているのかを実地で理解したいと考えていた。そしてその知見を、将来、私が目指す国際協力や貧困支援の現場に活かすことを目標としていた。

2. 実際に参加して感じた変化

実際に能登を訪れて最も印象に残ったのは、「地域の人々の強さとしなやかさ」である。七尾市や輪島市、珠洲市など、いずれの地域も能登半島地震の影響を大きく受けていたが、現地の方々はその中でも、地域を、人々を、支え合う姿勢があった。彼らの言葉の端々には、土地への誇りと、次の世代へ文化を継承しようとする強い意志が感じられた。

能登の暮らしは“自然と人間の間”に成り立っている。ここでは、農業・漁業・林業が互いに連携し、自然を搾取するのではなく“借りて使う”という意識が根付いていた。この考え方は、私がこれまで学んできた「サステナビリティ（持続可能性）」の理念を、まさに生活の中で体現したものだと感じた。

また、被災した地域の見学を通じて、復興が単なる「再建」ではなく、「人々の誇りと生活を再び立ち上げる過程」であることを実感した。壊れた建物の跡地にも、地域の方々

が自ら再生の計画を立て、文化と産業を取り戻そうとしている姿があった。それは、外部からの支援に頼るだけでなく、「自分たちで未来をつくる」という力強い姿勢であったように思う。

この経験を通して、私は「地域再生」や「支援」の概念を改めて考え直すことになった。これまで私は、支援とは“外から助けること”だと漠然と捉えていた。しかし能登の人々の姿を見て、それは“内から再生する力を引き出すこと”なのではないか、と思ったのだ。

3. 一番の学び・気づき

本研修を通して得た最大の学びは、「支援とは、相手の中にある力を信じ、引き出すこと」であると言える。能登の人々が地震後も自らの生活と文化を守り続けている姿は、国際協力や地域再生における理想的なモデルである。研修の中で、経済的な価値を超えた“生き方”としての誇りが感じる瞬間が度々あった。

奥能登塩田村で学んだ揚げ浜式製塩は、自然の力を最大限に活かしながら、人の手を通して塩をつくる持続可能な仕組みである。この体験を通して、効率性を重視する現代社会とは異なる“時間の流れ”の中にある豊かさを実感した。

私はこの経験を、自身の将来の夢である「ユニセフなどの国際機関での支援活動」にどうつなげるかを考えた。単に資金や物資を届けるだけではなく、現地の文化や知恵を尊重しながら、地域住民が自らの手で再生していける環境を整えることこそが、真の支援だと今は考えている。能登で見た“人の力”は、世界のどの地域でも通じる普遍的な価値であると感じた。

4. 今後への活かし方

今回の研修で得た学びは、今後の学習や進路において確実に活かせるものだろう。大学ではこれからも、社会システムやマーケティング、地域経済などの分野を通じて、「地域資源の発信」と「持続可能な地域づくり」の両立を探求していきたい。特に、地域の伝統産業を現代社会の中でどのように再構築し、若い世代に継承していくかという課題に取り組みたいと私は考えている。

さらに、海外との比較研究にも発展させたい。フィリピンのイフガオ棚田やインドネシアのバリ島など、伝統農法が観光や教育と結びついて地域経済を支えている事例を参照

し、能登との共通点や相違点を分析することで、「持続可能な地域開発モデル」の構築を目指せたらと思う。

5. 自身の変化と将来への展望

研修を終えた今、私は「支援する側」という立場を超え、「共に歩む人」でありたいと考えるようになった。地域に寄り添い、その中で共に成長していく姿勢こそが、真に持続可能な社会を築く基礎である。能登の人々から学んだのは、どんな困難の中にも希望を見いだす力、そして自らの文化を誇りとして生きる強さだ。

将来的には、石川・鳥取・フィリピンといった、私がこれまで関わってきた地域をつなぎ、「文化と環境の共存」をテーマに研究と実践を重ねていきたい。その為にも、地域に根ざした支援の形を模索しながら、国際協力の現場でも応用できる視点を養っていくことが、今後の私の課題だと感じている。

6. 次期参加学生へのメッセージ

次期参加学生の皆様へ。能登研修は、単なる視察ではなく、「自分の価値観を揺さぶられる3日間」でした。現地で出会う人々の言葉や笑顔は、教室では得られないリアルな学びをもたらすと思います。是非、自分の専門分野や将来の夢と結びつけながら、能登の里山里海に息づく知恵と生き方を肌で感じてください。

そして、研修を通して得た気づきを「自分ごと」として考え続けることが大切だと私は気付きました。能登での学びは、きっと人生の軸を形づくる貴重な原体験となると思います。

この度、大変貴重な体験をさせてくださった、先生方、職員方、そして能登の皆様、一緒にお勉強をしてくださった学生の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。